自由意志の否定は何を帰結するか

―スピノザの『エチカ』第五部における「感情の治療」―

柴田健志

はじめに

『エチカ』のなかでも、第五部はとりわけ重要なテキストとみなされてきた。「第三種の認識」という、スピノザ解釈において最も重要な思想がこのテキストのなかにまとめて出てくるからである。ところが、『エチカ』第五部をよくみると、「第三種の認識」に割かれているのは合計四二個の定理のうちのほぼ半分にあたる定理二一から定理四二までにすぎない。定理一から定理二十までは、「第三種の認識」ではなく「感情の治療」を主題にしているのである。このように「第三種の認識」と「感情の治療」は『エチカ』第五部を半分ずつ分け合っているのに、スピノザ解釈はこれまで「第三種の認識」にのみ目を奪われすぎてきた。フロイトとの比較研究[一]などを別とすれば、「感情の治療」がそれ自体として主題的に取り扱われたことはこれまでほとんどなかったといってよい[二]。しかし、これはたいへん不公平な取り扱いであるように私には思われる。なぜなら、表向きは「感情の治療」という主題のもとに続く二十個の定理は、自由意志の否定という、スピノザ哲学においては「第三種の認識」に匹敵する重要性をもつ思想を、実践的な問題として展開したテキストとして

理解できるからである。スピノザが自由意志の存在を否定したことは、哲学史の常識とすらなっている。ところがよく知られているのはじつはスピノザが自由意志の存在を否定したという点だけであって、自由意志の存在を否定するといったいどのような利益があるとスピノザは自身は考えていたのかという点はほとんど認識されていないのである(三)。この点をはっきりさせるためには、「感情の治療」に注目しなければならないのである。

一　スピノザの証言

スピノザによれば、人間はおのれの「衝動」は意識できても、その「衝動」を決定している原因までは意識できないがゆえに、おのれを自由であると思っている(四)。そのような、何ものによっても決定されていない自由な意志を行使しうる存在として、人間はおのれを理解しているというのである。いうまでもなく、スピノザはこのような信念を幻想とみなす。スピノザがこの点の証明に割いた定理は『エチカ』第二部定理四八、四九の二つであるが、この二つの定理に関してまず指摘すべきことは、第一に、これが自由意志を否定する理論にすぎないという点、しかし第二に、定理四九に添付された長い注解のなかで、この理論の「有用性(utilitates)」が『エチカ』第五部の主旨となることが予告されているという点である。スピノザの言葉によれば、この理論の「有用性」についてはこの注解のなかでも少しばかり触れるが、「主要な有用性は第五部においてわれわれがいうであろうことからよりよく理解されるであろう」(五)。

私の意図は、この「有用性」という語を、自由意志を否定する理論のもつ実践的な含意という意味に理解し、そのような理解にもとづいて『エチカ』第五部前半の「感情の治療」を読み直すという点にある。ところで、スピノザはたんに「第五部」とだけいっているが、私の考えではそれはやはり第五部の前半でなければならない。なぜなら『エチカ』第二部定

理四七注解で、スピノザは「第三種の認識」について、同じように「その優越性と有用性についてわれわれが述べる場は、第五部のなかにあるであろう」(六)といっているのだが、こちらの方が第五部の後半を指すことは明白だからである。つまりは、『エチカ』第五部全体が実践的な観点で書かれており、その前半の「感情の治療」の部分では自由意志を否定することの実践的な意味が、また後半では文字通り「第三種の認識」の実践的な意味が、それぞれ取り扱われていると考えられるのである。

二　自由意志の否定

『エチカ』第五部前半の「感情の治療」は、『エチカ』第二部定理四八、四九の自由意志の否定の理論がもつ実践的な意味を展開したものである。この点を議論する前に、まず自由意志の否定ということで、いったい何が否定されているのかを正確に把握しておかねばならない。

定理四八で否定されているのは、「意志」という一般的な能力の存在である。デカルトは、懐疑にもとづいてこうした能力の存在を確信していた。すなわち、私はどれほど自明と思われる事柄でも否定することができるということ、いや、厳密には実際にそれらを否定できたという経験からこうした能力の存在を確信していったのである(七)。しかし、スピノザによれば、意志というのはつねに「この意志」として存在するのであって、そのような個々の意志作用から独立した、一般的な能力としての意志など存在しない。ところで、いわゆる「自由意志」と呼ばれているのは一般的な能力としての意志のことである。それゆえ、自由意志は存在しない。定理四八を引用しよう。

魂の中には、絶対的な意志すなわち自由意志は存在しない。むしろ、魂はこれまたはあれを意志するように原因によって決定され、この原因もまた他の原因によって決定され、さらにこの原因も他の原因によって決定され、こうして無限に進む。

このように、スピノザが否定したのはあくまで一般的な能力という意味での自由意志の存在であって、個別的な意志作用の存在は何ら否定されてはいないのである。したがって、スピノザの議論がもしこれで終わりだとすれば、スピノザは自由意志を全面的に否定したとはいえない。というのも、与えられた認識をその都度無差別に肯定したり否定したりすることができれば、やはりわれわれは自由意志をもっているといいうるからである。もっているというのがいいすぎであれば、自由意志を行使することができるといい直してもよい。そういい直したとしても、現に行使されているあいだは自由意志の存在は認められなければならないことになる。いうまでもなく、スピノザはこの点を見逃しはしなかった。それゆえ定理四九では、個々の意志作用が、はたして個々の認識（観念）に対して外的に作用しうるものなのかどうかが問われ、そういうことは不可能であるという点が証明されている。スピノザによれば、意志作用は認識（観念）の外から無差別に行使されるものではなく、逆に個々の認識（観念）に含まれている。われわれは自分が考えていることを意志しているだけであって、まず何かを考え、しかる後にそれを外から肯定・否定しているのではないのである(八)。スピノザの考えによれば、意志とは結局、観念が含む肯定・否定の作用にほかならない。定理四九を引用しよう。

魂の中にはいかなる意志作用も存在しない。つまり観念が観念である限りにおいて含む以外の、いかなる肯定・否定も存在しない。

スピノザはこうして意志作用を認識（観念）に吸収したのである。「意志と知性は同一である」(九)。ここで定理四八、四九の構造をまとめてみよう。スピノザは、定理四八では個別的な意志作用しか認めないという唯名論に立った上で、続く定理四九でさらにその個別的な意志作用を認識作用の中に吸収し、意志の独立存在を徹底的に排除しているのである。ただし、定理四八の注解で「意志という言葉を肯定・否定する能力と解するので、欲望と解するのではない」とわざわざ注意されているように、ここでその存在を否定されているのは、対象を追求したり忌避したりする欲望の存在ではない。認識（観念）の外から、認識（観念）を肯定したり否定したりする絶対的な能力の存在が、ここで問題になっているにすぎない。

三　感情の治療

くり返していえば、『エチカ』第五部前半の「感情の治療」は、理論としてはすでに『エチカ』第二部で証明ずみの自由意志の否定という主題の実践的な含意を展開したものである。私は、この点を議論する前提として、自由意志の否定の論理をたどってみた。ここでようやく、問題の『エチカ』第五部を繙いてみなければならない。『エチカ』第五部定理二をまず引用しよう。この定理は「感情の治療」がいかになされうるかを定式化したものである。

もし我々が魂の動きつまり感情を外部の原因の思惟から切り離し、他の思惟に結合すれば、外部の原因に対する愛あるいは憎しみは、これらの感情から生じる魂の動揺と同じく破壊されるであろう。

読まれるとおり、ここには「自由意志」はおろか「自由」という言葉さえ使われていない。引用は省略するが、この定理の証明のなかにも、これらの言葉はもちろん出てこない。この定理を文字通りに読めば、「愛」や「憎しみ」のような感情を破壊するには、その感情を外部の原因の思惟から切り離し別の思惟に結合しなければならない、ということがいわれているにすぎない。「憎しみ」はともかく、なぜ「愛」まで破壊せねばならぬかについては、後で触れることにするが、この定理の主旨は、もはや感情に煩わされることなくおのれの生を肯定できるような境地に至るための生の技法を要約する点にある。ところが、この定理が要約する生の技法については、それがあまりに抽象的であるがゆえに、具体的に何をすればよいかは必ずしもはじめから明瞭に理解できるとはいえない。いったい「感情を外部の原因の思惟から切り離し、他の思惟に結合」するとは何のことなのであろうか。そもそも「外部の原因」とは何であろうか。また「他の思惟」とは何であろうか。この点が不明であるため、「切り離す」とか「結合」するとかいわれても、さて何をどうもっていけばよいのか、具体的に了解できないというものである。この点が押さえられないと、これに続く諸定理も、その論理はたどれたとして、何を主旨にそういうことが証明されているかがどうも頭に入ってこないという、困ったことになりかねない。したがって、この定理の解釈は重要である。

自由意志の否定の「有用性」はこの第五部を読めばよりよく理解される、とスピノザ自身が述べていたことを思い出さなければならない。この定理の意味を明瞭に理解するには、自由意志の否定という点を考慮に入れておかねばならないのである。すると、まず第一に指摘できる点は、感情を馴致するために、自由意志などという存在しないものを持ち出してもうまくいくはずがないので、それとは別の技法に依らねばならず、それがこの定理二で述べられているのであろう、という点である。実際、スピノザの判断するところでは、自由意志が存在するという信念にもとづいて考え出された道徳説、とりわけ感情への対処法はこれまでうまくいったことがなかった。スピノザは『エチカ』第五部序言の大半をストア派と

デカルトの道徳説の批判に費やしているが、その批判の要点は、ストア派もデカルトも、われわれの意志が感情を支配しうるという観点から道徳説を作り上げようとしたが、そのような理論はうまくいかなかった、という点に集約することができる。デカルトについての評価に言及することはここでは省略するとして、ストア派についてのスピノザの評価をみてみよう。スピノザによれば、「ストア派は諸感情がわれわれの意志に絶対的に依存しており、われわれは諸感情を絶対的に支配できると信じた」が、「経験の抗議」によってこの考えを修正せざるをえなかった（一〇）。そして、このような自由意志にもとづく道徳説に対して、スピノザは「知性」の能力にもとづく倫理学を提案するのである。だから、『エチカ』第五部の表題も「知性の能力あるいは人間の自由について」となっている。以上の点をテキストで確認しよう。『エチカ』第五部序言の末尾で、スピノザはこう述べている。

魂の能力は、先に私が示したように、ただ知性によってのみ規定されるのであるから、感情の治療――私の信じるところでは、それをすべての人が実際に経験しているが、ただし明確に観察したり判明に観てはいない――をわれわれはただ魂の認識によって決定し、そこから魂の至福に関わるすべてのことを導き出すであろう（一一）。

自由意志の存在を前提して作り出された感情への対処法には欠陥があるがゆえに、別の仕方で感情への対処法を考え直す必要がある。感情に対処するのに自由意志など役立たずである以上、「知性の能力」に頼らざるをえない。その方法が「感情の治療」である。いま引用した『エチカ』第五部序言の末尾で、スピノザが「私の信じるところでは、それをすべての人が実際に経験しているが、ただし明確に観察したり判明に観てはいない」と述べている点が重要である。人間が感情にうまく対処できたときには、実際に自由意志などに頼っていないというのである。にもかかわらず、人間は自分が自由で

しく対処し損ねている。こう考えれば、スピノザが『エチカ』第二部定理四九の注解で触れていた、自由意志の否定の「有用性」とは、自由意志を否定することによって、人間がじつはこれまで実際にやってきており、したがってまた今後も実行可能な感情への対処法がどのようなものかをはっきり示すことができる、という点にあることになる。

実際、人間はお互いを自由であるとみなすことでかえって強力な愛憎関係に巻き込まれる。「人間はみずからを自由であるとみなすがゆえに、他のものに対してよりも相互に対してより大きな愛または憎しみを抱き合う」(一二)。感情が煩わしいのは、それが互いを自由とみなす人間たちのあいだで生きられるものであるがゆえである。この限り、「憎しみ」であれ「愛」であれ、いずれ煩わしいことに変わりない。自由意志にもとづく道徳は、このような愛憎関係を温存し、助長しこそすれ、それらを馴致することにはとても到らないと考えられるのである。

後の議論の前提として、この論点をここでもう少し敷衍しておく必要がある。自由意志の否定の「有用性」はスピノザが『エチカ』第五部で提案する「感情の治療」からよりよく理解される、というのが本当なら、ここで治療されるべき感情は、人間に対する感情であることになる。われわれは人間以外のものを自由とはみなしていないのだから。無論、定理にはただ「感情」とのみ書き記されている以上、それはすべての感情を指しているのであろうが、少なくともスピノザの関心の中心が人間に対する感情であったという点は間違いないと考えられるのである。そう考えれば、定理五が置かれている意味も明瞭になるであろう。定理五を引用しよう。

われわれがたんに表象するのみで、必然的とも可能的とも偶然的とも表象しないものに対する感情は、その他の事情が等しければ、すべての感情の中で最大である。

「たんに表象するもの」というのは、この定理の証明で「自由であると表象するもの」といい換えられている。いうまでもなく、人間のことである。すなわちこの定理は、人間に対する感情がすべての感情の中で最大だというのである。人間にとって最も煩わしく、したがって治療が必要なのは人間に対する感情なのである。あいつのせいだと考えた途端、感情は思考をかき乱し始める。しかし、そうでなければ、感情はむしろ充実した生に不可欠の要因であろう。

さて、この点を踏まえた上で、もう一度定理二の「感情の治療」の定式に戻ってみよう。その意味することが、先ほどに較べ、幾分かは明瞭に理解できるのではなかろうか。自分も相手も自由であるという信念が感情を煩わしいものにしているのだとすれば、自由意志によってそれに対処するなどというのは火に油を注ぐがごとき愚行である。むしろ、感情には知的に対処すべきであって、そのためにはあいつのせいだと思うことを止め、もっと別の仕方で感情を捉え直してみる方がよい。「感情を外部の原因の思惟から切り離し、他の思惟に結合」するというのはそういうことであろう。つまり「外部の原因」とは他者、別の言葉でいえば人格のことなのである。

すると問題は、感情をどんな仕方で捉え直すかという点である。「他の思惟に結合」するとは、どんなことなのであろうか。

四　自然現象としての感情

感情を治療するには、人間というのは単独で何かの原因となりうるようなものでなく、他の原因によって決定されている存在なのだという点を認識することがまず必要である。実際、そのような認識によって感情の重みは軽減されうる。こ

の点はすでに『エチカ』第三部定理四八において示唆されている。

> 愛と憎しみ、例えばペテロに対する愛と憎しみは、憎しみが含む悲しみ、愛が含む喜びが、他の原因の観念と結合すれば破壊される。また愛も憎しみもペテロがその唯一の原因でなかったとわれわれが表象する限りにおいて減少する。

この点を認識するなら、「愛」も「憎しみ」も誰かひとりの人間が原因で生まれるのでなく、もっと複雑な事物の連鎖による決定を経ておのれにやってきている、と考えることが可能である。さらに、この考えを徹底させるなら、「愛」や「憎しみ」をいわば頭痛や発熱のように自然の因果によって複雑に決定されて生じたものとして理解するという観点に立つことができよう。「他の思惟」というのは、このように感情を一個の自然現象として理解することができるような思惟のことであると解釈しうるのである。

こうして、「感情を外部の原因の思惟から切り離し、他の思惟に結合」することによって、「外部の原因に対する愛や憎しみは破壊される」。すなわち、愛憎関係の煩わしさから解放されるのである。以上が『エチカ』第五部定理二の解釈である。この定理の意味を以上のように理解すると、以下の定理の主旨も、ほぼ確定できるのではなかろうか。それがうまくいけば、そこから逆に、定理二について今私が示した解釈の妥当性が証明されるといってもよいであろう。順を追ってみていくことにしよう[一三]。

定理三は、感情を一個の自然現象として理解するということが、結局のところ何をやっていることになるかを説明したものとして理解することができる。すなわち、このような仕方で感情を理解することは、感情についての十全な観念をもつことなのであり、その結果として、われわれは受動という状態から脱することができるというのである。定理三を引用

しよう。

受動である感情は、われわれがそれについて明晰判明な観念を形成すると同時に受動であることを止める。

スピノザはここで「明晰判明な観念」というデカルト流の用語を用いているが、スピノザ本来の用語を用いるなら「十全な観念」である。スピノザの用語法では、「十全」な観念をもつときの我々は「能動」という状態にあり、逆に「不十全」な観念をもつとき「受動」という状態にある(一四)。われわれが自己の感情を誰かのせいにしているとき、われわれは感情を「不十全」にしか認識しておらず、「受動」という状態にある。逆にそのような考えから離れ、感情を一個の自然現象として理解するとき、われわれは感情を「十全」に認識でき「能動」という状態にある、ということである。

ところで、感情を自然現象として理解するということは何を意味するであろうか。感情を一般法則によって理解するということを意味する。感情は、物体現象と同様に、一定の法則にのっとって人間に生じている。例えば、重い物体が軽い物体を跳ね返すという現象は、一定の法則にしたがって生じる必然的な現象である。同様に、自分が愛するものが破壊されることを表象すれば、われわれは悲しみを感じる(一五)。この悲しみが、自分の愛するものを破壊した人物に向けられ、その人物への憎しみ(一六)となっているあいだは、われわれはこの感情を「不十全」にしか理解していない。しかし、自分の愛するものが破壊されるという表象はわれわれに悲しみをもたすものなのだという、感情の法則によってこの感情を理解するなら、それでこの感情はもう「十全」に理解されたことになる。以上が定理三の意味である。

定理四は、感情をこのように一般法則によって理解することができるということの理由づけとして解釈することができる。まず、定理を引用しよう。

われわれが何らかの明晰判明な概念を形成できないようないかなる身体の変様も存在しない。

定理三では「明晰判明な観念」といわれていたものがここでは「明晰判明な概念」という言葉に変わっているという点に注意すべきである。この定理の証明が「すべてのものに共通のものは十全にしか概念されえない」という点から始まっているとおり、ここでスピノザは彼が「共通概念」と呼ぶものに依拠している。それゆえ、定理四の解釈のためには、少しばかり論点を迂回して、この「共通概念」に関するスピノザの議論を押さえておく必要がある。

定理の中に含まれる「身体の変様」という言葉から始めよう。スピノザの考えによれば、人間身体は外部の物体からつねに作用を受けてその状態を変化させている。その状態が「身体の変様(affectio)」である。ところで、身体に生じた変様を人間の魂は知覚していると考えられる。人間の魂には「身体の変様」の「観念」がある[一七]。スピノザのいう「感情(affectus)」とは、このような身体の状態の持続およびその観念の両方を指して用いられる用語なのである[一八]。身体の活動能力が増大するような変様が「喜び」をもたらし、またそれが減少するような変様が「悲しみ」をもたらすと考えられる[一九]。ところが、身体の変様にはそれを引き起こした外部の物体の本性が含まれている。それが感情の原因として表象されるのである。この原因に向けられた喜びは「愛」として感じられ、また悲しみは「憎しみ」として感じられる[二〇]。これこそ、感情が「不十全」に理解されてしまうメカニズムである。

ところがスピノザは、身体の変様には「すべてのものに共通」であるようなものもまた含まれているという[二一]。もしそういうものがなければ、人間身体は外部の物体から作用を受けたり、また反対に作用を及ぼしたりすることなどできないはずである。したがって、人間身体が現に様々な仕方で外部から刺激されている以上、そういう共通のものがあるので

なければならない。しかも、そういうものがあるとすれば、それは「十全」にしか理解できない、という(二二)。明らかに、スピノザは人間身体が外部からの刺激を受容し、変様する際の法則を考えている。「すべてのもの共通」であるものとは、人間身体の変様を生み出す法則のことであり、したがってまた感情を生み出す法則のことであると解釈してよい。それについての概念は、身体の変様の中に含まれているはずだから、われわれは喜びや悲しみを感じるとき、同時にそれらがいかにして生じたかを理解する手がかりをも知覚していることになる。それがスピノザのいう「共通概念」(二三)にほかならない。この「共通概念」をうまく組み立てて感情を理解するとき、われわれは感情を一個の自然現象のごとく理解するであろう。いい換えれば、感情を「十全」に理解し、「感情の治療」をなしうるであろう。こうして、定理四はどんな感情も治療しうるということの根拠として解釈しうるのである。

　定理五の意味にはすでに言及しておいたから、あらためてこの定理に触れることはせず、その先の定理へ進もう。定理六から定理二十は、内容の点で二つのブロックに区切ることができる。定理六から定理十が前半、定理十一から二十が後半である。「感情の治療」のトータルな理解のためにはどちらも重要なテキストであるが、それぞれ独立した考察を要求するテキストと考えられるので、今回はこれらの考察を省略せざるをえない。ただし、この二つのテキストがそれぞれ何を主題としているかはここで簡単に触れておくべきであろう。

　私の解釈では、いわゆる「感情の治療」にかんする基本的な議論は定理四までで完了している。「感情の治療」とは、誰もがもっている「共通概念」を活用して感情を理解することだが、そのような認識をスピノザは「第二種の認識」と呼んでいる(二四)。これに対して、感情を外部の原因に結びつけて理解するのは「第一種の認識」と呼ばれる(二五)。定理六からは、ひきつづきこの「第二種の認識」が主題になっているが、文脈が少し違ってくる。定理四までは文字通り認識によって感情を治療するという文脈の中に「第二種の認識」は置かれている。ところが、定理六から定理十では、「第二種の認識」

の認識としての側面ではなく、この認識にともなって生じる諸感情が「感情の治療」において果たす役割の分析に重点が移されている(二六)。

ところで、「第二種の認識」にともなって生じる諸感情によって満たされた人間の魂には「強さ」(二七)が帰せられる。定理十一以下では、このような「強さ」が最高度に表現されるのは、人間が神を愛するときである、という文脈が現れる。神を愛する者はあの世で救われるのでなく、この世で感情に煩わされることなくおのれの生を肯定する。定理十一から二十までは、「神に対する愛」(二八)という新しい文脈を構成しているのである。さらにこのテキストは、『エチカ』第五部後半の「神の知的愛」(二九)との対照という難しい問題を含んでいる。

これらのテキストの解釈は別の機会に譲るとして、『エチカ』第五部の冒頭に置かれていながら、あえてここまで触れてこなかった定理一を最後に取り上げて考察しておくことにする。

五　第二種の認識

まず定理一を引用しよう。

思惟および事物の観念が魂の中で秩序づけられ連結されるにしたがい、それに正確に対応して身体の変様つまり事物の表象は身体の中で秩序づけられ連結される。

この定理の要点は、思惟の秩序と連結に、身体の変様の秩序と連結が対応するという点にある。このことが何を意味する

かを明瞭に理解するためには、『エチカ』第二部定理十八注解を参照すべきである。そこでは、身体の秩序と連結に、思惟の秩序と連結が対応するということが証明されている。この二つの定理では、思惟と身体の主従関係が逆さまになっていることがすぐに眼につくが、これは、いわゆる心身平行論の二面である(三〇)。平行なのだからどちらか一方が他方の原因になるわけではないが、定理一のように思惟が〈主〉の位置になるとき「第二種の認識」が生じ、また逆に「第一種の認識」が生じている場合には身体が〈主〉の位置についている、と考えれば、スピノザの意図はほぼ了解できたという る。

定理十八の主旨は「記憶」のメカニズムを解明することにあるのだが、「記憶」について指摘されていることは「表象」という認識一般に当てはまると考えてよい。すなわち「第一種の認識」に当てはまると考えてよい。スピノザによると、「記憶」とは「人間身体の外部にある諸事物の本性を含むような諸観念の何らかの連結」にほかならず、「この連結は人間身体の変様の秩序と連結に対応して魂の中に生じる」。このように、「記憶」とは、したがってまた「第一種の認識」とは、外部の物体からの刺激によって人間身体に生じた変様の秩序と連結に、思惟の秩序と連結が対応して生じるときの認識なのである。身体の変様の観念は外部の原因の観念を含むから、「第一種の認識」によって思惟している限り、われわれはおのれの感情を誰かのせいにするという発想から逃れることができない。

これに対して、思惟の秩序と連結に身体の変様の秩序と連結が対応するのは、われわれが「第二種の認識」によって思惟する場合である。「共通概念」を連結させて思惟するとき、身体の変様は外部の原因から切り離され、一般法則のもとに理解されることができる。したがって、われわれはもはや感情を誰かのせいにはしない。このように、定理一において取り扱われているは「第二種の認識」のメカニズムである。ではそれがなぜ『エチカ』第五部の始めに置かれているのであろうか。すでに論じてきたとおり、『エチカ』第五部前半の主題である「感情の治療」が「第二種の認識」によってな

されるからである。『エチカ』第五部が、このように「第二種の認識」が生じた時の心身の主従関係の逆転から説き起こされているのはそのためである。

おわりに

この論文は、自由意志の否定と「感情の治療」との本質的な結びつきを明確にすることが課題であった。結論は、やはり自由意志の否定が「感情の治療」の大前提となっているという点に尽きる。最後に、この結論をもう少し具体的な形に敷衍してみなければならない。

「感情の治療」は「第二種の認識」によってなされること、したがってまた『エチカ』第五部前半は「第二種の認識」の実践的機能についての記述として解釈しうるという点を私は示した。では、自由意志の否定と「第二種の認識」の関係はどう考えられるのであろうか。ここで当然この点が問題になるであろう。

「第二種の認識」とはわれわれがすでにもっている「共通概念」を組み立てることで成立する認識である。ところが、「共通概念」はすべての人間に与えられているはずなのに、ほとんどの人間は「第一種の認識」で思惟している。それがスピノザの考えである。ではなぜそういうことになるのであろうか。ジル・ドゥルーズは、人間は「共通概念」を獲得するのであって始めからそれを持っているのではないと解釈し、だからスピノザの問題は「不十全」な観念しかもたない人間がいかにして「共通概念」という「十全」な観念を獲得するかという点にあったのだと決めつけ、その獲得方法を『エチカ』から読み取ろうとしている。ほとんどの人間が「第一種の認識」によってしか思惟することができず、したがって感情の奴隷たらざるをえないのは、彼らが「共通概念」をもっていないからだ、というのである(三一)。しかし、私の解釈によれ

ば、スピノザの問題はそんなところにはない。「共通概念」はすべての人間に共通であるがゆえにそのように呼ばれる[三二]。「共通概念」は誰もがもっているのである。しかし、それらを実際に稼働させることのできない理由がやはりすべての人間にはある。それが自由意志の幻想である。この点を明確にするために、ヨベルの議論がたいへん参考になる。「共通概念」は誰もが知覚しているが、それと自覚されることはない。この意味で「共通概念」はいわば「暗黙の入力情報」であるとヨベルは述べている[三三]。ヨベルによれば、ほとんどの人間は「外部の原因」という「明白な入力情報」[三四]にのみたよっているがゆえに、「共通概念」を活用してものを見ることができないのである。言い換えれば、人間が互いを自由意志の主体と見なし、おのれの感情を他人のせいにしているあいだは、「共通概念」というせっかくの道具は有効に活用されることができないのである。それゆえに、「共通概念」が連結され、現実に「第二種の認識」として活用されるには、自由意志は否定されていなければならない。自由意志の否定と「第二種の認識」の関係はこのようなものである。感情を「外部の原因の思惟から切り離し、他の思惟に結合する」というのが「感情の治療」であったが、この「切り離し」と「結合」という一連の操作を実行し、われわれの思惟を「第二種の認識」へと組み込むために、自由意志の否定が必要だったのである。

【凡例】

スピノザのテキストはすべてゲプハルト版全集に依る。
GEBHARDT, *SPINOZA OPERA*, Heidelberg, 1925 [G]

注

（一）松田［一九九五］、吉田［一九九六］、Yovel [1989] などを参照

（二）「感情の治療」を主題的に取り扱った論文には、私の知る限り次の二点がある。大西［二〇〇四］［二〇〇五］

（三）自由意志の否定のもつ倫理学的含意を強調した解釈が入門書の体裁で出ている。上野［二〇〇五］を参照

（四）『エチカ』第一部付録 [G. II p.78]、書簡五八 [G. IV p.266]

（五）G. II p.131

（六）G. II p.128

（七）デカルト『哲学原理』第一部三九節　Cf. Descartes [1996] pp.19-20

（八）この点について心理学者のヴィゴツキーが興味深いことを述べている。「もし私が今晩、何かしようと決めたなら、私はしなければならないことを想起しなければなりません。スピノザの有名なことばによると、精神が、しなければならないことを想起しなければ、精神は何ら自己決定をすることができないのです」。ヴィゴツキー［二〇〇二］四七～四八頁参照。ヴィゴツキーが言及しているのは『エチカ』第三部定理二注解

（九）『エチカ』第二部定理四九系

（一〇）G. II p.277. ストア派における感情の治療については、廣川［二〇〇〇］、Nussbaum [1994] などを参照

（一一）G. II p.280

（一二）『エチカ』第三部定理四九注解

（一三）ベネットは、定理二、三、四を感情治療の三つの技法と解している。Cf. Bennette [1984] pp.333-342. これに対して、私は、以下に述べるように、定理三、四が定理二を説明し根拠づけていると解する

（一四）『エチカ』第三部定理三

（一五）『エチカ』第三部定理九

（一六）『エチカ』第三部定理二二

（一七）『エチカ』第二部定理十九
（一八）『エチカ』第三部定義三
（一九）『エチカ』第三部定理十一注解
（二〇）『エチカ』第三部定理十三注解
（二一）『エチカ』第二部定理三八
（二二）同前
（二三）『エチカ』第二部定理四十注解一
（二四）『エチカ』第二部定理四十注解二
（二五）同前
（二六）この論点に関してはすでに優れた考察が存在している。大西［二〇〇四］一八九〜一九二頁を参照
（二七）『エチカ』第三部定理五九注解
（二八）『エチカ』第五部定理定理十六
（二九）『エチカ』第五部定理三五
（三〇）Cf. Gueroult [1974] pp.74-75
（三一）Cf. Deleuze [1968] pp.252-267. ドゥルーズの解釈に対する私の批判は、柴田［二〇〇五］［二〇〇八］を参照
（三二）『エチカ』第二部定理三八系
（三三）Cf. Yovel [1994] p.99
（三四）*ibid.*

文献

Jonathan Bennete [1984] *A Study of Spinoza's Ethics*, Hackett

Gilles Deleuze [1968] *Spinoza et le Problème de l'expression*, ed.Minuit

Descartes [1996] Adam & Tannery(ed.), *Oeuvre de Descartes* VIII, vrin

Martial Gueroult [1974] *Spinoza II*, Aubier

松田克進［一九九五］「スピノザと精神分析」『倫理学年報』第四四集

廣川洋一［二〇〇〇］『古代感情論』岩波書店

Martha C. Nussbaum [1994] *The Therapy of Desire*, Princeton

大西克智［二〇〇四］「スピノザ『エティカ』における感情の治癒(1)共通概念の射程と満足の力による支え」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集』23号

――［二〇〇五］「スピノザ『エティカ』における感情の治癒(2)高邁の態勢(disposition)を肖像として念ずること」『哲学雑誌』No.792

柴田健志［二〇〇五］「真理と生―スピノザの知識論再考―」『哲学』第五六号

――［二〇〇八］「人間の隷属と善悪の概念―スピノザの『エチカ』第四部に関する考察―」『倫理学研究』第38集

上野修［二〇〇五］『スピノザの世界』講談社現代新書

ヴィゴツキー［二〇〇二］『子どもの心はつくられる』菅田洋一郎監訳、広瀬信雄訳、新読書社

吉田和弘［一九九六］「フロイトとスピノザに関する雑考」『Imago』二月増刊

Yirmiyahu Yovel [1989] *Spinoza and other Heretics II*, Princeton

――[1994] "Second Kind of Knowledge and Removal of Error," Yovel(ed) *Spinoza on Knowledge and the Human Mind*, BLILL